

つまり菅野氏の一文は「離家」という詩語に『楚辞』の投影があることを見抜き、そこから屈原の憂国の情を暗に自分自身にだぶらせる道真の心情に照射させようとされたものであった。<sup>(2)</sup>

こうした考察の流れに沿った中で巻尾に置かれている「514 謫居春雪」を再度考察してみると、新たな事実が浮かび上がってくる。ここに、巻頭と巻尾の二詩を原文のみ並記してみる。

476 五言自詠

514 謫居春雪

離家 三四月

盈城溢郭幾梅花

落淚百千行

猶是風光早歲華

万事皆如夢

雁足黏將疑繫帛

時々仰彼蒼

烏頭点著思歸家

(傍線 筆者)

(傍線 筆者)

傍線部の詩語に注目してみる。一句目の「離家」に込められている心情は、菅野氏の前述の論文で既に明らかにされているが、更に「514 謫居春雪」と並記してみた時、「離家」に対して「帰家」という語が呼応関係を形作る詩語として配置されていることに気付く。更に「476 自詠」の四句目「時々仰彼蒼」の句意を「514 謫居春雪」の四句目「烏頭点著」に込められている中国古典籍の『燕丹子』の一文「謬言曰、令烏頭白、馬生角、乃可。丹仰